

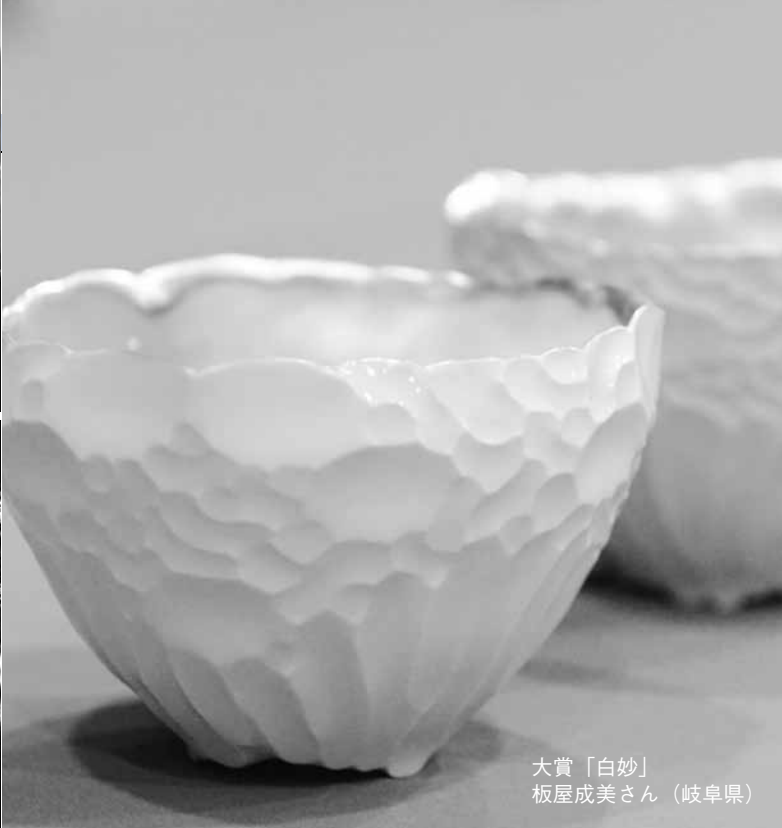
江戸から現代まで 花火の進化を紹介

8/14 第13回安曇野花火

第13回安曇野花火（実行委員会主催）が明科御宝田遊水池の犀川河川敷で開かれました。「令和に刻む、新しい安曇野の夏」をテーマに、約1万2,000発の花火が安曇野の夏の夜空を彩りました。

花火の進化を紹介したプログラムでは、江戸時代初期の「和火」と呼ばれるオレンジ色の花火から、金属を利用し色鮮やかな表現が可能になった現代の花火まで、多種多様な花火が打ち上げられました。

また、音楽に合わせて打ち上げられる音楽花火や、結婚祝い・家族への感謝などの言葉とともに打ち上げられるメッセージ花火など、趣向を凝らした花火に会場は大きな歓声と拍手に包まれていました。



大賞「白妙」
板屋成美さん（岐阜県）

視覚で楽しむ「食」のアート

8/20 第8回そば猪口アート公募展審査会

第8回そば猪口アート公募展審査会が明科公民館で行われ、入賞11作品が発表されました。大賞に選ばれたのは板屋成美さん（岐阜県）の白磁器「白妙」。表側の華麗な模様やその模様を際立たせる内側の銀彩のデザインなどが高く評価されました。

恒例となったこの公募展には、味覚だけでなく視覚でもそばを楽しませるさまざまなデザインのそば猪口が、海外を含む全国各地の幅広い世代から寄せられ、全221作品の中から審査員が慎重に入賞・入選作品を選び出しました。入賞・入選を果たした計125作品は10月19日から11月17日まで、安曇野高橋節郎記念美術館に展示されます。

宇宙の起源を最小粒子から紐解く

8/22 市民大学講座信州大学編

信州大学理学部の竹下徹教授を講師に迎え、第3回の市民大学講座が豊科交流学习センター「きぼう」で開かれました。竹下教授は冒頭、宇宙が無限に広ければ夜空は均一に分布する星の光で埋め尽くされるはずだが、現実とはそうではないという「オルバースのパラドックス」を紹介し、宇宙の起源を最小粒子から解説しました。2013年ノーベル物理学賞のヒッグス粒子発見に関与した竹下教授は、スイスのジュネーブにある直径9km円周27kmの世界最大の加速器LHCの製作秘話を語り、会場に集まった約100人の受講者は、メモを取るなどして熱心に耳を傾けていました。

講座に参加した古瀬昌彦さん（豊科）は「世界の科学の最先端を知ることができた」と話してくれました。

「安曇野暮らし」を味わう2日間

8/24～25 夏の安曇野体験会

安曇野への移住を希望している県外在住者を対象に「夏の安曇野体験会」が開催されました。本年度は、初めて1泊2日の日程で開かれ、市内へ移住した人の住宅や市が貸し出しているおためし住宅の見学、夕方からは参加者と移住者、安曇野暮らし支援協議会のスタッフなどとの交流会が行われました。

東京都から参加した鈴木さん夫妻は「個人的に来るよりも、地元の人や移住者に話を聞くことができ、いろいろな選択肢があることが分かり有意義だった」「2人とも都会で生まれ育ったので、水が美味しく、自然のある田舎で定年後は暮らしたい。安曇野に初めて来たが、空気もおいしく、清々しい。子ども達も連れて、また来たい」と笑顔で話してくれました。



堀金地域 手作りのお祭り

8/31 第3回常念フェスティバル

第3回常念フェスティバル（実行委員会主催）が堀金中央公園と常念ドームで開かれ、フリーマーケットや仮装行列など、さまざまな催しが行われました。

パフォーマンスでは「シャベラーズ26」の皆さんによるスコップ三味線（右写真）などが披露され、会場を盛り上げました。仮装行列では、戦国武将やお化けなどに変装した参加者が、常念ドームからほりがね物産センターまで練り歩き来場者を楽しませました。「常念の里こども食堂」では、ぬかくどで炊いたご飯のおにぎりなどがふるまわれ、来場した親子は香り高いおにぎりに舌鼓を打っていました。



初の試み 能演目の字幕配信

8/24 第29回信州安曇野能楽鑑賞会

名誉市民である故・青木祥二郎さんの業績を顕彰し行われている第29回信州安曇野能楽鑑賞会が豊科公民館で開かれました。

本年は聴覚障がいのある人や能楽初心者も楽しめるよう、スマートフォンのアプリで能演目の字幕配信が行われました。能「鞍馬天狗」では、市内の児童が稚児役で出演し、舞台に花を添えました。仕舞・連吟・稚児役として舞台に上がった米村晏和さん（明南小5年生）は「仕舞を踊るのは緊張せず上手にできたが、本番の稚児役ではライトが自分に当たっていたので少し緊張した。実際に近くで演者の人を見ると声がしっかり出ていてかっよかった」と話してくれました。